

# 「原」を作る

## — 新しい時代の幼児教育 —

無藤 隆



### 1、発達の原点

幼児教育というのは人間の発達の最初の段階を扱うものである。だから、発達の始まりつまり原点に立って、その原点で作られるべきものが確かに作られるのを支えることではなからうか。もちろんその原点を作り出すのは子ども自身である。子どもがもともと持っている内的な傾向とごくごく小さいときに出会う様々な人や環境との関わりの中から発達が成立していく。そのような周りからの関わりのごく一部が狭い意味での幼児教育ではあ

るが、ここで広くとるならば、まさに保育が発達の原点である子どもが行なう作業というものを支えるわけである。

それでは、そのような発達の原点と呼べるようなものの中で、特に幼児教育にとって重要なものとしてどのようなものを挙げることができるだろうか。また、そこで保育者が子どもを支えるときの支え方のいくつかの原則が考えられないだろうか。むしろ、そのような最も基本的なところに視座をすえて考え直すことが幼児教育に

とって必要なことのように思われる。時代は確かに新しくなっているが、その原点として重要なことは時代を越えて共通しているはずである。そのような原点に立ちながら時代の変化にどこかで関わることで、それぞれそのときどきの新しい幼児教育のあり方が問われ応えられていかなければならないはずだ。

さて、そのような「原的」なものはいろいろ挙げることができ、ここでは特に四つ挙げてみたい。人間関係、家庭、そして風景、また社会である。これらの四つで幼児教育にとって重要な「原」がつかまるわけではないが、少なくともこれらが重要な働きを果たすし、発達の基盤を構成する最も重要ないくつかであることは明らかである。

## 2、原人間関係

乳幼児期に人間関係の基盤が作られることは明らかである。とりわけ大事なのは言うまでもなく、子どもと最初に出会う養育者との関係である。その養育者は多くの

場合母親であるだろう。また、母親であることが生物学的な自然さにある程度関連していることも確かである。いずれにせよ、そのような母子関係がどのように形成されるかはいわゆる愛着関係を基礎とした原人間関係の核となるはずである。

小さな子どもはそのような母子関係にみられるある種の人間関係の原理を内面の中に取り入れて、その後出会う人間関係についての一つのモデルにすると考えられる。しかし、全てがそのような母子関係の延長線上で済むというものではない。唯一の養育者が赤ちゃんにとって重要なのではなくて、子どもを取り囲む様々な人がいて、それらの人々はそれなりに少しずつ異なった関係を赤ちゃんとあるいは幼児と取り結ぶはずである。つまり、ここでの問題は原人間関係が一種類のものなのか否かといったことである。

むしろ、多様な人間関係がすでに原人間関係の中に含まれているとみることもできる。実際、母子関係に加え父子関係、あるいは兄弟関係といったものが挙げられる

し、また保育園や幼稚園に行きだせば保育者との関係は確かに母親との関係に類似しているにしても少し異なる独特の関係を形成するはずである。

ともあれ、幼児期において原人間関係を作り出すものは二者関係あるいは時に三者関係の濃密なやり取りの中に成立していくはずであるから、そのような原的なものを保育の現場の中で作り出す努力が保育の最も基盤になるはずである。

### 3、原家庭

保育を広く捉えて、いわゆる幼児教育機関以外の家庭を含めて考えてみよう。特に小さい子どもは家庭というものがどういうものであるかのイメージをどこかで作っていくにちがいない。ここで家庭というのは、母子関係と少し次元が異なっている。家庭が家庭といういくつかの人間関係を含む、しかもその人間関係のネットワークだけではない特定の場、空間であることが、今ここで問題である。

一戸建てにせよ、あるいはマンションやアパートの一室であるにせよ、特定のある閉ざされた空間の中に濃密な人間関係が生起する。その空間の中では、ごくごく日常的な様々な諸活動が毎日同じような形で同じような順序で繰り返されていく。朝起きたら歯を磨く、顔を洗う、トイレに行く、着替える、食事をする、お出かけをするといったことがあり、しかもそれはほとんど毎日のように繰り返されるものである。あるいは、家庭の中にいくつかの部屋があり、各々の部屋の中にはいくつかの家具があり、その家具の使い方もあり、またしてはいけないことも多くある。そして、それらの空間とそこに占めるものはその特定の家族のものであり、時には個々人の家族メンバーに分かれているにせよ、基本的には家族全体のもので扱われるものでもある。

また、家庭の心理的な働きということもある。家庭はみんながくつろいで安らぐ場でもある。家庭では他の人には言えないような、見せることができないような発言や行動をしたり、あるいは表情を示すこともある。そこ

での物や人との関わりは濃厚な感情に結びつき、好きだったり時にいやだったりすることと密接に関連している。そのようなものの総体が家庭であるとするならば、幼児においてそのような家庭を体験し馴染み知識を得ていくことは発達の原点としてきわめて重要なことである。

幼稚園や保育園はそのような家庭を模倣する形で成り立っている部分もある。家庭の働きを部分的に取り入れることによって保育関係が成り立つのだし、時には家庭の成立ちを補完するということもあるだろう。いずれにしても、家庭とそのバリエーションが乳幼児期に重要な働きをすることは明らかである。したがって、いかにしてその原的な意味での家庭を子どもたちに確保し、十全な形で提供していくかということが子どもを囲む大人の重要な責任となるはずである。また、幼児教育機関において、どの程度家庭的な意味合いを含み込むべきかということも考えなければならぬ。

#### 4、原風景

小さい子どもは家庭の中にいるだけではない。外にも出て行く。例えば、お散歩をしたり、買い物をしたりして、近所を歩くことがあるだろう。そのようなことを通じて、子どもは少しずつ個々の家を含み込む地域についてのイメージを形成していくはずである。

その地域には、道があり、お店があり、公園がある。また、自分たちと同じような子どもがいたりいなかったり、違うお父さんやお母さんがいる別の家庭もある。その中には、自動車が走ったり、バスが走ったり、電車が走っている。道ばたや公園には草や木が生えている。そして、傍らには土があり、砂場には砂があり、水が流れているかもしれないし、砂場では水のみ場から水を運んで遊ぶこともできる。目を上げれば、青い空が広がったり白い雲が流れていたりする。遠くに山が見えたり海が見えたりする場所もあるだろう。逆に大きなビルがそびえ立っていることもあるかもしれない。

そのようなことを含めて、子どもにとって風景という

もの、地域というものの原点がそこに形成されると考えることができるだろう。どの道を行けばどこに着くかといった地域についての地図のイメージが形成されていく。また、それぞれの所にどういうものがあるのか、どういう働きをするかといったことも必要になる。さらに、それらを構成する様々な素材についても少しずつ馴染んでいく。水ひとつとっても、それは流れたり、淀んだり、暖かかったり、冷たかったり、叩けばはねて水しぶきが飛んだり、砂と混じって泥を作り出したりといった様々な変化の形態を見せる。そのような様々な見え方や感触を含めて、風景を知るといふ風に名づけることができるだろう。風景を子どもにも提供するには、子どもを定期的に外に連れ出して歩くだけで自ずと形成されていくにちがいない。その範囲では、特に意図的な教育という働きはないけれども、ともあれ乳幼児期を過ごす場所においてここで言う原風景が作られることは大切である。

それに加えて教育的に考えるならば、子どもが学ぶ風

景には、いくつかなくてはならない要素があるというように見なされる。例えば、都会の真ん中で緑がほとんどないような地域にあっても、やはり子どもに草や木や花を見せたいと我々は思う。あるいは、虫や鳥や動物に触れさせたいと思う。土や泥、砂、水にいじくらせたいとも思うのである。それは、それらのものがこの世の中を構成する大事な要素であるから、子どもにそのようなものを知ってもらわなければ大人として困ることもあるし、さらにそのようなものが我々の文化的な感覚の大事な要素であるからということもあるだろう。いづれにせよ、草や木がどういふものであるかという科学的な知識だけではなくて、例えば木が風にそよぐときのそよぎ方であるとか、光に当たるときの緑の美しさであるといったことまでも、子どもに知ってほしいと大人である我々は願うのである。

そのような願いがあるならば、幼稚園や保育園はやはり地域の実態に応じて、その地域に十分にはない風景の要素を園の中に取り入れて子どもに示す必要があるはず

である。そのような意味で、幼稚園の環境構成は重要になるのである。したがって、幼稚園に必ず砂場がなければならぬとか、花壇がなければならぬとかというこ  
とではないはずである。行政的にはいくつかのものが必需であるときれるかもしれないが、大事なことはむしろ  
地域の実態に応じてそこに乏しいものを補うという働き  
が必要なはずである。

また、それとは別に、幼稚園において一つのまとま  
った風景を別な形の風景のモデルとして提示することも  
あつていいだろう。少なからぬ時間を過ごす以上、幼稚  
園もまた一つの風景のまとまりをなすはずであり、そこ  
で何が示されるかは子どもの近所の風景のあり方と関連  
しながら、また独立に子どもにも影響も与えるはずであ  
る。

## 5、原社会

人間関係が発展し様々な人間関係へと広がるというこ  
とは、別な言い方をすれば、そこに社会が構成されると

いうことでもある。特に幼稚園や保育園に入り、様々な  
子どもとひとつの集団を構成する中で、社会の基本的な  
原理が学ばれる。

そういう意味では、幼稚園は大人である保育者が陰で  
支えてはいるものの、子どもによって構成される社会で  
あり、子どもはそこに入園にすることによって小さな社  
会に参入していくと見なすこともできる。例えば、強い  
とか弱いということを知るだろうし、強さ、弱さを決め  
るものは体力や知力やユーモアであるとか、機転が効く  
といったことであるということも学んでいくだろう。ま  
た、様々な利害が対立していきこざになりその解決に努  
力することを通じて、それぞれが必ずしも悪いわけでは  
ないのに人と人が対立することがあるとか、その対立を  
解消するためにはお互いの言い分を伝え合つて妥協点を  
見いださなければならぬとかいった我々の社会の構成  
原理の大事なことを学んでもいい。

要するに、二者関係、三者関係を越えた、目の前の子  
どもたち以外の構成員も含む集団を社会と呼べば、社会

の始まりが幼稚園や保育園にある。そこでは例えば、「みんな」ということが大事な働きをもつようになり、子どもたちはみんなということをいろいろな形で使うようにもなる。

## 6、原を支え、発展させる

以上のような「原」が大事なことは明らかである。それ以外に原点となりうるものがあるにしても、そのようなものを含め、発達の「原」を作るものが乳幼児期の教育において決定的に重要であり、初めにも述べたようにそれはいつの時代にも大切なことのはずである。むしろ、新しい時代に何が大切なのかを考えるとときには、そのような原を作るときに必要なもの、より十全なものにするためになくてはならないもの、少なくともあった方が望ましいものが現代の生活の中で必ずしも十分にならないとか、あるいは偏って存在してしまうとかといったことが問題となる。

そのような場合、特に幼児教育機関ではそれを補う、

あるいは部分的でしかないものを発展させるという作業が必要となってくる。さらに、幼稚園なら幼稚園というひとつの空間の中において、ある意味で家庭で作られた原的なものをもう一度ふり返り、改めて少し違う角度で作り返すチャンスが与えられる。その意味では、幼稚園や保育園は第二の原点を作り出す場でもあるので、そのような角度から幼稚園における原的なものを検討し、家庭との結びつきを考えることも必要である。このような角度から考えると、原的なものを作る幼児教育の営みは、まさに子どもが出会うすべての局面において、子どもは原的なものを獲得しているはずだという認識から始まるはずだし、子どもが発達の原点を作っていくそのプロセスを助け、より好ましい方向へと発展させることが大事なはずなのである。

(お茶の水女子大学)